

# News Letter

Foreign Student Service, Agriculture

## 留学断想

外村 辨一郎

〔前京都大学国際交流委員〕  
〔農学部教授・食品工学教室〕

古い話で恐縮だが、アメリカに留学した頃の思い出から始めよう。私は、1960年10月末、旅費を節約しようとして貨物船に乗って横浜港からアメリカに向かった。ロスアンジェルス貨物港サンベドロに上陸して、そこからグレイハウンドバスで目的地ラホヤ (La Jolla) に行くことにした。乗客の中で東洋人は私一人、しかも、ダークスーツにネクタイという、およそ南カリフォルニアの乗合バスの乗客としては不似合いな恰好に皆の視線を痛いほど意識しながら、私のアメリカ独り旅は出発した。

隣りの席の乗客は、アメリカ海兵隊員として日本と韓国に駐留し、先日除隊になったばかりという青年であった。お互いに自己紹介の後、最初に彼は「僕は日本が嫌いだ」と言った。私は機先を制されてどぎまぎした。何しろ相手は名にし負うアメリカ海兵隊員。彼はその年の5月東京で、日米安保条約締結をめぐる大抗議デモに出会っていた。「日本人はアメリカを憎んでいる。僕はそんな日本が嫌いだ」と彼は言う。私は緊張し、片言の英語で詰まり詰まりながら、大多数の日本人は決して反米ではないこと、彼が遭遇した抗議デモは反政府デモであって反米デモではないことなどを話そうとした。私の説明で彼が納得したとは思えないが、話しているうちに彼の表情も柔和になり、結婚している兄さんを訪ねる途中であることや兄さんの家族に日本で土産を買ってきたことなどを話して、わざわざ鞆から土産の七宝調の箱を取り出して見せてくれたりした。ラホヤの一つ手前の町デルマー (Del Mar) で彼はバスを降りたが、その間に、自分の手帳の頁の端を破って、それに電話番号を書いて私に手渡し、もし私が目当ての人に逢えなかったら、この番号で彼の兄さんの家に電話するように、自分が助けに行くからと言ってくれた。私は感激した。日本は嫌いだと言いつつ、日本人と言えども、もし個人が困っているなら助けよう、そこに、私はアメリカの市民の心根を見たように思った。これが、私がその後8年近くの留学生活を通じて、アメリカの人達から受けた数多くの親切の最初であった。

近年、わが国に於いても国際交流の気運は益々高まり、いろいろのシステムが活動するようになってきたのは嬉しい限りである。例えば、前号 (No. 16) で丸山教授がお書きになっているように、短期間でも比較的年齢の若い時に外国生活を体験することが国際理解にとっては大切であるとの考えに基づき、近年欧米で盛んな短期留学制度をわが国でも取り入れつつある。学部生、大学院生を問わず積極的にこの制度を利用して留学の機会を掴まると良いと思う。一方、この制度によって本学に留学してくる人達を対象に、国際教育プログラムの準備が進んでいる。このプログラムは留学生と本学の正規の学部生とが同じ講義 (英語で行われる) を共に受けることを骨子としている。このユニークな制度が定着、発展することを大いに期待している。

現在のわが国の留学生受け入れシステムの最大の難点は宿舎の問題ではないだろうか。我々自身の住宅事情を考慮すると、留学生と日本人学生とが起居を共にする学寮が是非欲しいと思う。留学の形態はいろいろであるが、わが農学部も常に100人近い外国からの留学生・研究者を迎え入れている。種々の文化的背景を持つ人達と接することが出来るのは、平和時なればこそその恩恵である。

留学することの効用の一つは、それまで自分が育ってきたとは異なる文化的環境・価値体系の中に身を置くことによって、母国そして自分自身がより客観的に見えるようになることにあると私は思う。留学生諸君が異文化の中に入り込むのにいろいろな抵抗を感じているのは想像に難くない。しかし、そういう抵抗を超えて、或いはそれを余り気にせず、或いは敢えてそれを無視して、留学生諸君が出来るだけ平常の自分を出して日本人の間に入って行く努力をして欲しいと、私は思う。私自身留学中は、アメリカの生活に抵抗感がある間はこの国に住む価値があるのだと考えることにしていた。抵抗感があることは、何かを学んでいるということでもある。

国際理解の根底にあるものは個人レベルでの信頼である。それを幾重にも積み重ねていく努力が必要であろう。客人を迎える側も他所行きの面を付けていたのでは長続きはしない。私達も、特別なこととしてではなく、対等の友人として留学生を受け入れたいものである。異文化を背負って遠路はるばる訪れてくれた人達は私達自身の姿を映し出す鏡でもある。それによって私達自身の生活を見直し豊かにすることが出来れば極めて有り難いことと言わねばならない。2500年前の哲人の言葉は、今なお私達の間で親しく生きている：朋あり、遠方より来たる、亦た楽しからずや。



農学部外国人留学生歓迎パーティーで挨拶される筆者

Madison で思ったこと

福山 征光

(農芸化学専攻)

1. 研究室探しについて

アメリカはサイエンスにおける多くの分野で世界をリードしています。私は、そのアメリカで研究室に所属し、教官や学生がどの様にプロジェクトを進めていくか、また私と同年代の学生たちはどんなことをサイエンスやその他のことについて考え、どんな生活を送っているのだろうかといったことを少しでも知りたく留学を志望しました。そこで八月の半ばにマディソンに着いてからすぐに、興味のある研究室の教官を訪ね歩き、私を受け入れてくれるかどうか交渉しました。恥ずかしいことに今でもそうなのですが、その当時の私の英語力は、自己紹介するのさえ支障があり、向こうが何を言っているのかほとんど理解できませんでした。しかも、アポイントメントもなしに（と言うのも、電話だと全く相手が何を言っているのか見当がつかないから）ドカドカと教授室に入り、いきなり交渉し始めると

いう余り器用ではないやり方でした。しかし、どの教官もとても辛抱強く私の話を傾けてくれ、運良くこの馬の骨ともしれない私を捨ててくれる教官を見つけ、私のアメリカにおける研究生生活が始まりました。ここでちょっと話はそれますが、交換留学生は、必要単位数などについては、本来学部生扱いであり、大学院の授業も取れないのですが、大学の事務室と交渉して、私の立場を院生扱いにしてもらいました。恐らくアメリカの大学一般に言えることだと思いますが、研究室の分属にしる事務手続きに関しては、日本の大学に比べて、交渉次第で結構融通の利くところが多いようです。

2. 大学院生の扱いについて

理系の大学院生は、全員給料（奨学金）を貰っているのには驚きました。確かに学部生の補習授業で教えたりしなければいけないという義務が課されるのですが、これは本当に（少なくとも生徒には）良い制度だと思います。給料の額自体は何とか生活できる程度なのですが、コンサート代（レニー・クラビッツとローリングストーンズのジョイントコンサートでもダフ屋で買えば\$25ぐらい!!!）やビールやガソリンや家賃やレストランでのタイ料理などが日本よりはるかに安く、テニスコートや温水プール等のスポーツ施設はほとんど無料で利用できるのも、彼らは結構いい生活をしています。私は政治や経済については疎い人

留学生室ニュース

農学研究科博士後期課程編入学考査

平成8年度農学研究科博士後期課程編入学考査は、1月24・25日に行われ、21名が合格しました。このうち私費外国人留学生は農芸化学専攻1名（中国）、食品工学専攻1名（韓国）、畜産学専攻1名（パングラデシュ）、生物資源経済学専攻2名（インドネシア・中国）の合計5名でした。

農学部私費外国人特別選考試験

平成8年度私費外国人留学生特別選考試験には、合格者がありませんでした。

外国人留学生（研究者）の博士号取得状況  
(平成7年1月～12月)

当該1年間に京都大学農学研究科に博士論文を提出し、京大博（農）の学位を授与された外国人留学生（研究者）は23名です。このうち、同博士課程修了者は18名です。取得者の名前と論文テーマは以下の通りです。

段 建 雄（農学専攻）

Studies on Rapid Propagation and Precocious Flowering of Orchids *in vitro* and *in vivo* (*in vitro* 及び *in vivo* におけるラン類の急速増殖と早期開花に関する研究)

Sundararaju Bakthavatsalam（農芸化学専攻）

Structure and Function of Thermostable and Halotolerant Leucine Dehydrogenases (耐熱性及び耐塩性ロイシンデヒドロゲナーゼの構造と機能)

Dwight Agpoon Eusebio（林産工学専攻）

Manufacture of Cement-Bonded Particleboard with Isocyanate Resin or Sodium Hydrogen Carbonate (イソシアネート樹脂又は炭酸水素ナトリウム添加による木質セメントボードの製造)

龔 建 新（熱帯農学専攻）

農村地域に於ける居住空間の分布に関する基礎的研究

Ilyas Antimon（畜産学専攻）

Studies on Body Composition in Zinc Deficient Rats and Dietary Factors Affecting Zinc Availability (亜鉛欠乏ラットにおける体構成成分の変化および亜鉛の利用性に及ぼす飼料中因子に関する研究)

Tran Linh Thuoc（食品工学専攻）

Studies on a New Type of Glutathione Peroxidase Induced by Oxidative Stress in *Hansenula mrakii* (*Hansenula mrakii* の酸化的ストレスにより誘導される新規なグルタチオンペルオキシダーゼに関する研究)

苗 登 明（農芸化学専攻）

Roles of the *ssi* Sites and Iterons in DNA Replication of the Broad Host-Range Plasmid RSF1010 (広宿主域プラスミド RSF1010 DNAの複製における *ssi* 部位とイテロン配列の役割)

劉 吉 泉（農芸化学専攻）

Structure and Catalytic Function of Bacterial L-2-Halo Acid Dehalogenases (細菌 L-2-ハロ酸デハロゲナーゼの構造と触媒機能)

Arthur Bob Karnuah（畜産学専攻）

Estimation of Beef Carcass Composition by Computer Image Analysis of the Cross Section (枝肉横断面のコンピュータ画像解析による牛枝肉構成の推定)

李 根 植（農芸化学専攻）

Structural and Functional Analysis of Cyanobacterial Genes Homologous to Chloroplast Genes of a Liverwort *Marchantia polymorpha* (ゼニゴケ葉緑体と相同性を持つラン藻の遺伝子構造と機能解析)

Yuporn Chanyongvorakul（食品工学専攻）

Studies on Processing of Food Proteins by Transglutaminase (トランスグルタミナーゼによる食品タンパク質の加工に関する研究)

いい生活をしています。私は政治や経済については疎い人間ですが、単純に彼らが羨ましい限りでした。

次に授業についてですが、私も試しに生化学科の必須かつHARDといわれている授業を登録してみました。この授業は実際にTOUGHで、三ヶ月の間にCELL, NATURE, SCIENCE等のランドマーク的論文を50報余り読まされ、実験の組立て方やデータの解析等を問う三時間もかかる試験を三回も受けました。大学院生の一、二年目は、皆実験以上に勉強に時間をかけて、研究者としての必要最低限のスタンダードを徹底的にトレーニングされるのです。実際のところ、これがアメリカが基礎科学に強い原因の一つではないかと思えます。

### 3. 留学生であること

基本的に毎日楽しく、色々発見の多い生活でしたが、やはり母国語以外の言語を使って生活するというのは、ときには非常にストレスを伴いました。研究室のグループミーティングでのときや、ビールを飲みながら談笑しているときなど、自分の言いたい事が10%も言えずに自分自身に腹が立ったことが何度かありました。また一人で勝手に落ち込んでしまうときもありました。それでも何とかやっていけたのは、まわりの人達の何気ない励ましのお陰でした。確かに違う言語や文化を持った人とコミュニケーションするのは結構エネルギーが要るけれども（私はパーテ

ィーなどで3時間ほど英語を聞き続けるととても眠くなる人間です）、そういった「壁」のようなものを越えて魅力的な人にたくさん知り合う事ができたのは非常に心の財産となりました。

現在、私の周囲には留学生は全くいませんが、マディソンで得た経験を思い出して、言語や文化を越えて素晴らしい人達と知り合えたらと思います。



留学先の研究室で、深夜に学友とビールを飲むところ

申 媛 善 (食品工学専攻)

Studies on Roles of Domain Structure in Food Functionalities of Bovine Serum Albumin (ウシ血清アルブミンの食品機能特性におけるドメイン構造の役割)

Andi Gunawan (林学専攻)

Preference and Attitude for Landscape and Land Use of Bogor City (ボゴール市の景観と土地利用に関する住民の意識と選好)

邊 明 宇 (食品工学専攻)

Studies on Preservation and Processing Properties of Gamma-Irradiated Foods (ガンマ線照射の食品の貯蔵加工性への効果に関する研究)

Marek Tchorzewski (農芸化学専攻)

Structure and Function of Nitroalkane-Oxidizing Flavoenzymes (ニトロアルカンを酸化するフラビン酵素の構造と機能)

Nawarath Chareonpong (食品工学専攻)

Studies on Secondary Iron Overload Caused by Selenium Deficiency in Rat (ラットのセレン欠乏による二次的鉄過剰に関する研究)

許 徳 (農林経済学専攻)

養豚経営の成長・発展と国際競争力強化の可能性に関する研究

Riaz Hasan (農芸化学専攻)

Synthesis of Insecticidal Pyrazolines and Their Mode-of-Action (殺虫性ピラゾリン類の合成と作用機構)

盧 重 協 (食品工学専攻)

Studies on Monoamine Oxidase of *Escherichia coli* K-12 (大腸菌 K-12 のモノアミン酸化酵素に関する研究)

Vincenzo Nardi-Dei (農芸化学専攻)

L- and DL-2-Halo Acid Dehalogenases from *Pseudomonas* Bacteria: Structures and Catalytic Functions (*Pseudomonas* 属細菌の L- 及び DL-2-ハロ酸デハロゲナーゼ: 構造と触媒機能)

鄭 起 煥 (農林経済学専攻)

Transformation of Family Farms in the Process of Korean Industrialization (韓国の産業化過程における家族農業経営の変貌)

Slamet Mulyono (林学専攻)

Studies on Mental Acceptability of Transmigration in East

Kalimantan (東カリマンタンにおける移住モデルの心理的受容度に関する研究)

万 建 民 (農学専攻)

Analysis of Hybrid Sterility Gene Loci for Hybrid Rice Breeding and Understanding of Varietal Differentiations (ハイブリッド・ライス育成と品種分化の解明をめざした雑種不稔遺伝子座の分析)

## ア・ラ・カ・ル・ト

### 日本語教室の開講

農学部および農学研究科に在籍する外国人留学生(研究者)にとって、指導教官、さらには所属する講座や教室の学生との日本語によるコミュニケーションを円滑にすることは、研究上および日常生活のいろいろな問題を解決するのに欠かせません。農学部留学生室は、小さな試みですが、農学部国際交流後援会の支援を受け、福本和代さんを講師に迎えて、1995年9月から初級、中・上級という2クラスの形で、週1回の日本語教室を開講することとなりました。1996年度は、2クラス、週1回そのまま、外国人留学生(研究者)の奥さん等にも受講の門を広げ、なごやかに勉強できる環境を整えたいと計画しています。また、農学部・農学研究科事務に働きかけ、しっかりと開講のための予算的基盤を確立できるよう努力したいと考えています。

### 日本語教室の講師: 福本和代さん

農学部留学生のみなさん、こんにちは。

みなさんは農学部留学生室を知っていますか。その部屋を覗いたことがありますか。去年の12月にできた、農学部で一番新しい建物の一階にあります。わたしは、そこで1週間に1時間ずつ2回、日本語教室を担当しています。

この日本語教室は、授業や研究に忙しくて時間のとれない人に、研究室で日本語を話す機会が少ない人に、少しでも日本語勉強の役に立つことができるようにと、去年の10月から始められました。

現在、和気あいあいと楽しく日本語を学習(話す・聞く・書く)しています。

是非、みなさんも参加してください。omachisiteimasu!





## Studying Conditions in Kyodai

**Mehmet Hakki Alma**

(Division of Wood Science  
and Technology, Turkey)

First of all, I would like to state which wind brought me to Japan for studying; when I was in Malaysia as a visiting scholar in 1991, I was introduced with my present supervisor Prof. Nobuo Shiraishi, who was also there due to a symposium held at the same time. After this introduction and following nice conversations, I was impressed by him and his novel approaches on the composite materials. After I went back to my home country, by his help and permission of God, I had a chance to get Monbusho Scholarship to study in Japan. Although I had been aware that study in Japanese Universities was very tough and tiring, I decided to come here owing to more sufficient facilities and opportunities for my study compared to my home country. Indeed, prior to coming Japan, I had already admitted to Ph. D. course for 1 year in my home country.

When I arrived in Japan, my first and general impressions on Japan were that almost every streets were very clean, appearance of the city was quite well-designed, and there was no jobless people on the street. I was also happy to study in Kyoto city, which is one of the most famous and biggest cities in the world and the most traditional and typical city of Japan.

Upon my arrival in Kyoto, my aforementioned adviser Prof. Shiraishi welcomed me kindly by giving a party and so on. Everything started very well in the beginning. Concerning with study, initially Assistant Professor Mariko Yoshioka guided me very kindly, and thereafter I could conduct experiments by myself. By chance, when I arrived in Kyoto, it was graduation season of students, which is very intensive time for Japanese universities. In this term, leaving time of students for home was generally varying between 10 p.m. and 12 p.m. This was really very *okashii* for me because I have never stayed in university after about 6-7 p.m. in my home country like everybody. This active atmosphere motivated me to study initially very hard, and many times I took my lunch along with dinner. Moreover, staying everybody (about 9 students) in a single place was very different atmosphere to which I have never been accustomed before. However, I got used to this gradually.

On the other hand, whenever I needed reagents, devices, and so forth for my study, they were provided in a short time. Meanwhile periodicals, books, and other publications I always need could easily be found in laboratory, faculty or main libraries. Also, one of important points, which should be mentioned herein, is that all academic members and students in Wood Science and Technology were always eager to resolve my problems I

faced time to time. I would also like to mention that collective and systematic studies and discussions are main reasons for the development of Japan in a short time after world war II. Especially, *SENPAI-KOHAI* system applied currently results in fruitful progresses in Japan. It is also interesting to notice that this system was applied by Ottoman Empire (Osman Toruko) for about 500 years, which was considered by historian one of the important factors for its success on science and technology.

Unfortunately, I couldn't give sufficient time for getting Japanese language because I was too busy with my major experiments, and my adviser had good enough English for communications. For this reason, I couldn't fully understand sufficiently Japanese's way of thinking and substantial structure of their society and also I missed a lot of information regarding to both study and social affairs. Thereby, I advise foreigners studying in Japan to give enough importance to Japanese language as well as their main studies. Indeed, one of the aims of Monbusho for giving this kind of scholarship is to improve exchanges among different cultures. However, I cannot say that I fulfill this duty so far. This is due, mainly, to the misinformation of mass-media controlled by outside powers about our people and idea (i.e., Islam). In other words, the term of terrorism and Islam was imposed together. For the reason, somebody who was not aware of Islamic society considered us as a militant. I hope that this sort of misunderstanding/misconception will be eradicated soon, and then we will able to understand each other clearly.

In conclusion, I have gained lots of new experiences, new approaches, and very motivated life during the course of a 3.4-year studying in Japan. I hope that I will able to keep in touch with my Adviser and my colleagues in the future. In fact, I will miss greenness, cherry blossom (*sakura*), and maple with pink and red color in Kyoto.



夏期の研修旅行に参加した留学生と日本人院生  
(於：日本モンキーセンター，犬山市)

発行所 京都市左京区北白町追分町  
京都大学農学部留学生室  
電話 (075)753-6298, 6299  
印刷所 京都市上京区下立売通小川東入  
中西印刷株式会社  
電話 (075)441-3155~8